

第四十九回 高城

～島津氏の野望と挫折～

山本 忠博

今回は九州の高城をご紹介します。この城は、薩摩国と大隅国（現鹿児島県）を領した島津氏が、九州制覇の野望を膨らませるに至った戦いの主戦場になるとともに、その野望を砕かれる戦いの主戦場にもなりました。

高城は日向国（現宮崎県）にある城です。と言っても、実はこれだけでは、何処の城か明確には特定できません。日向国には、高城と呼ばれる城が三つ在って、「日向三高城」と呼ばれます。新納院高城（児湯郡木城町）、三保院高城（都城市高城町）、穆佐院高城（宮崎市高岡町）の三つです。今回ご紹介するのは、新納院高城です。「高城」が地名化しているため、高城城と呼ばれたりもします。ちなみに、高城又は高城城と表記される城は多くて、筆者が知るだけでも、宮崎県以外に、長崎県、鳥取県、三重県、新潟県に存在します。今回は、日向新納院高城のことを単に「高城」として、書き進めます。

高城の概要

小丸川は、旧名を高城川と言い、宮崎県の南北に長い海岸線の中ほどで、海に流れ出ています。この河口から7kmほど上がった所の北側に、高城は在ります。城の北の護りは旧谷瀬戸川（現切原川）の断崖で、南の護りは先程の旧高城川（以降、河川名は旧名で統一します）の断崖でした。東側では高城川に谷瀬戸川が合流していましたから、城の北、東、南の三方を二つの川で囲まれていたことになります。唯一平地に繋がっていた西側には、7本の堀切（7重の空堀、現在確認出来るのは5本）を設けて、敵の侵入を阻んでいました。

はっきりと城の構築を確認できるのは1335年で、島津氏の支族（新納氏）がこの地の地頭職に就いた時のことです。その後、日向北部の名族である土持氏を経て、この土持氏を追い出した伊東氏のものとなって、戦国期を迎えます。

1570年代初頭の九州

戦国時代末期、1570年代初頭の九州における最大勢力は大友氏です。大友氏は、九州の北東部を中心に、九州九ヶ国のうち、不完全ながら六州を支配していました。残る三州のうち、薩摩国と大隅国に島津氏、日向国に伊東氏がいました。

島津氏と大友氏は、ともに鎌倉時代から続く家で、どちらも源頼朝のご落胤説（偽史でしょうが……）のある名族です。後に両氏は高城で激突することになりますが、この時点では伊東氏という緩衝があったため、良好な関係にありました。

この関係が崩れるのは、1577年に、島津氏が伊東氏を日向国から追い出して、両氏の勢力が直に接したことによります。

島津氏の日向侵攻

日向国の伊東氏も、鎌倉時代から続く名家です。ディープな歴史好きなら、「曾我兄弟の仇討ち」の、あの伊東です」と言えば、お解り頂けるでしょうか。伊東氏は、鎌倉時代以降、日向国の土持氏と結びながら力を付け、遂には、その土持氏を高城周辺から追い出して、日向国内に確固たる勢力を築きました。戦国期終盤の伊東義祐の代に勢力を更に拡大させ、義祐は朝廷の従三位（武家としては破格の高位）に就いて、最盛期を築きました。しかし、義祐は奢侈に流れたうえに仏事に入れあげ、絶頂期から途端に衰退期を迎えてしまいます。少し話は反れますが、義祐の最期は行き倒れ寸前（ある意味、悠々気まま）だったわけで、この人はたいへん興味深い武将ではあります。

さて、島津氏と伊東氏の日向国をめぐる戦いで、島津氏の優位が確定したのは、1572年です。日向南部の完全支配を目指す義祐が、圧倒的に有利な兵力で島津氏に攻撃を仕掛けたものの、多くの指揮官を失って、まさかの敗退をしてしまいます。この後、伊東氏の勢力は急激に減退し、配下

の寝返りが相次いで、戦いらしい戦いをしないまま、義祐は、^{ぶんこ}豊後国(現大分県)の^{そうりん}大友宗麟の下に逃げました。

第一次高城合戦(耳川の戦い)

大友宗麟が伊東氏の救援の願い(1577年12月)を受けて、日向国に3万とも4万とも言われる兵を向けたのは1578年2月のことです。この時の大友氏の状況は、四方敵だらけで、大兵力を動かすには不適でした。しかし、日向国を切り取る時期があるとすれば、この時しか無かったかもしれません。伊東氏が戦わずして逃げたということは、伊東の残党も温存されているわけで、この勢力を島津側に取り込まれる前に使わない手はありません。実際、大友軍が日向国に侵入すると、高城から20数km北の耳川より北では、伊東氏の仇敵の土持氏以外は^{大友方}に寝返っています。耳川と高城の間にも大友方の勢力が入り、高城より南でも伊東の残党がいつ蜂起するかわからない状況で、島津側は苦しい立場にありました。

大友軍は、4月に土持氏の城を落として、耳川以北を制圧しました。このまま時間を置かずに、高城以南の伊東の残党の蜂起を誘いながら攻め込んでいけば、大友側の勝利で終わりそうところですが、歴史はそうはなりません。大友宗麟は何をしていたのでしょうか。土持氏を攻撃する時点で、宗麟は自領から出ていません。彼が遠方の自軍に出した指令は、神社仏閣の徹底破壊でした。実は、宗麟は狂信的とも言えるキリシタン大名で、日向攻めの主目的が、キリシタンの理想の国を作ることにあつたとされています。耳川以北制圧後の大友軍の動きの緩慢さは、嫌々ながらこの破壊活動をさせられていたからかもしれません(他に、食料調達や物資輸送の問題もあつたでしょうが……)。

宗麟は、8月に耳川よりかなり北の現在の延岡市無鹿に入って、本陣を構えます。そして、大友の遠征軍は、ようやく耳川を超え、10月に高城を囲み、猛攻撃を加えました。大友軍は大量の鉄砲に大砲まで使って攻撃をしましたが、島津側も良く防戦しました。

ここで、島津家当主の^{よしひさ}義久は、高城での決戦を決意します。11月に、谷瀬戸川の北に布陣した大友軍に前哨戦で勝利しつつ、高城川の南に2万とも3万とも言われる兵力を布陣させました。大友軍が耳川の北からしばらく動かなかったおかげで、これだけの兵力を集中させる準備ができたわけです。義久は滅多に最前線に出ない人でしたから、彼の並々ならぬ決意が感じられます。これには、島津側の指揮官達も驚いたそうです。

大友軍は、宗麟が後方の無鹿に留まったままで、指揮官同士の意思統一がなされませんでした。それで、慎重派が講和を画策する中で、主戦派が暴走して高城川の南の島津

軍に攻め掛かってしまいます。後世の人間が冷静に地図を眺めると、ずいぶん無謀なことをしたなど、思えます。まだ健全な敵の城に横腹を晒しながら、川を2本渡って、さして戦力差のない敵に突っ込むというのですから。大友軍は高城川を渡ったところで島津軍に三方から包囲され、総崩れとなりました。逃げる大友軍は大混乱に陥り、高城川と谷瀬戸川の合流点の辺りで多くが溺れました。島津軍の追撃は20数km離れた耳川まで続き、耳川で退路を断たれた大友兵が、ここでも多く犠牲になりました。

第二次高城合戦

第一次高城合戦の後、大友氏は一気に衰退します。代わって島津氏が躍進し、島津氏の九州制覇が目前に迫りました。ここに至って、大友宗麟は、豊臣秀吉に救援を要請し、秀吉もこれを受諾します。1587年のことです。

迫る豊臣の大軍に対して戦線の縮小を図った義久は、防衛線を高城と定めて戦略を練りました。この高城の方面に進軍してきたのは、秀吉の弟の秀長で、兄の天下取りを支えてきた名将です。この名将の下に8万と言われる軍が集結していたのですから、高城の囲みも万全なものでした。この囲みに対して、義久は投入できるだけの兵を投入し、精鋭をもって夜襲を仕掛けました。しかし、この攻撃は秀長側も予想ずみで、明け方まで続いた島津軍の攻撃を跳ね返してしまいました。

高城自体は力攻めでは落ちませんでしたが、島津本隊の敗戦の影響は大きく、島津氏は、九州制覇はおろか、家の存続すら危うい状況を悟らざるを得ませんでした。義久は秀吉に降伏し、島津家は元の薩摩国と大隅国に押し込まれることとなります。高城の戦いに始まった島津氏の九州制覇の夢は、高城の戦いをもって潰えたのです。

現在の高城

木城町役場のすぐ北に在り、現在は公園になっています。公園には桜が植えられ、春には、城山花まつりが行われているそうです。本丸を中心に曲輪の跡や堀切の遺構がよく残っており、歴史好きなら、一見の価値があると思います。



出典：木城町ホームページ
http://www.town.kijo.lg.jp/matidukuri-suisin/kanko_gaido/siroyama-kouen.html